

## 選評

大野陽子

### ヴァラッロのサクロ・モンテ第三六礼拝堂 カルヴァリオへの道 予型論図像と「キリストのまねび」の可視化

本論文は、ヴァラッロのサクロ・モンテと呼ばれる、聖地エルサレム巡礼を模した四五棟の礼拝堂のうち、第三六礼拝堂 カルヴァリオへの道 に注目し、その図像プログラムを、予型論の伝統と中世末期以来の「キリストのまねび」という信仰形態との両側面から読み解いた、堅実にして精緻な力作である。また、現地での実際の作品調査と文献学的なデスクワークという、美術史研究にとって基本的な二つの方法論的原則がバランスよく見事に統合されている点も、本論文の高く評価すべき成果であるといえる。

歴代司教のうちもっとも積極的にサクロ・モンテ建設に関与し、第三六礼拝堂の造営と図像に指示を与えたカルロ・バスカペー（在位一五九三 - 一六一五年）に関しては、これまでの研究でも、予型論への関心、「キリストのまねび」の形象化といった指摘はなされてきた。これにたいして、本論文の独創性は、主に次の二点に要約される。まず第一に、これらの先行研究を十分に検討したうえで、これまで研究対象とされてこなかった額絵の図像（「アビメレクのシケム攻略」）を、銘文やバスカペーのテキストをもとに分析し、「キリストの道行き」の予型として解釈した点。そして第二に、当時の巡礼者の視線の動きという観点から、この解釈を補強している点である。すなわち、覗き窓から堂内を眺める巡礼者は、キレネのシモン像の身振りと視線に促されて、十字架を担うキリストの彫像とともに、その背後の壁面上に、《伐採した木を運ぶアビメレクと民》の額絵を見ているという仕掛けになっていることが、本研究によって明らかにされたのである。さらにくわえて、こうした解釈がより広い文脈に、つまり、カルロ・ポッロメーオに象徴される北イタリアの対抗宗教改革という宗教的な文脈のなかに位置づけられていることも、評価されるべき点である。

ヴァラッロのサクロ・モンテの多くの礼拝堂は、リアルな彩色木彫と壁画装飾との組み合わせからなり、演劇的にしてかつ神学的、情動的にしてかつ知的、神秘的にしてかつ民衆的でもあるといった、相反するような性格を有する不思議な空間を作り出している。本論文は、そうした特異なサクロ・モンテの美術史的・宗教的な意味や機能の解釈に、新たな一石を投じるものである。ここに、本論文に『美術史』論文賞を授与する所以である。